

文学館の集い

北九州市立文学館開館記念・NHK北九州放送局開局75周年事業(12月6日・ムーブにて・参加者三五〇人)

◆対談「いのちのイメージが生まれるとき」

お話し：村田喜代子さん

(芥川賞作家)

聞き手：迎康子

(NHKラジオ深夜便アンカー)

迎 この対談は12月24日、クリスマススイブの午前四時からラジオ深夜便「マコころの時代」で放送されますが、普段、村田さんは夜はどう過ごされますか。

村田 夜は大好きなんです。今夜が長いのでとても幸せ。晩酌やったりしながら十二時ごろになると勿体なくて、友達に電話をしたりすると三秒で出てくれる人がいるんですね。夫は八時ごろには寝てしまい、犬も寝てみんなを寝かせてそれから私の幸せな時間がじまります。

迎 村田さんの作品世界って不思議な空間が開かれるので、夜中に書いてらっしゃるかなと思っ

ていたんですが。
村田 夜は晩酌の時間であり電話の時間なんです。夜は書きませ

ん。余程締め切りが間に合わない以外は。私は暗いのが嫌いなので夜に飲みに行くとか食事に行くとかしません。明るい家にいるのが幸せな時間なんです。明るい昼間も好きで、昼は外に出たいし、夜は家について晩酌する、では、いつ書くかということなんです。

迎 一つお書きになるんですか。
村田 早朝に書く作家もおられます。私も朝四時に起きて三時間くらい書くというのことにしたいと思いますが、今は昼間ですね。割りに定期的に書いています。

迎 今、村田さんの関心のあることはなんでしょう。
村田 大きく言えば環境汚染とか、化学物質の影響ですね。アメリカでは食品添加物の影響で、死体が腐りにくくなっているとか。せめて、私の周りでは手作りをしようと思つてます。今日も朝から蕪を煮てきました。海老と一緒に炊くと美味しいですよ。

迎 村田さんのイメージは、作品世界に不思議が満ち満ちているので、結婚して夫の世話をし子どもを育てるといふ家庭的イメージではないのですが、実はまめめしい主婦でいらつしやるんですよね。

村田 子どもの頃ママゴトが好きで、その延長上で生活できればありがたいなと思つていたの。

迎 だから主婦業も遊びの感覚でやつてるというが。

村田 そうですね。したい時はするし、したくない時はしない。男性は会社で定年があるのだから、女性も家事の定年があつていいのではないのかしら。

迎 そつやつつて「藤野行」を書かれたわけですね。

村田 あの頃はまだ四十代で、死ぬことは考えていないし、夫は現役だしまだ子どもが家にいて家人の世話で大変な時でした。姨捨などまだ実感が無い世界で、だから一生懸命になつたということもありましたね。今だつたら六十二になりましたから身につまされて書かないかもしれないね。「藤野行」は遠野の実際にあつた姨捨の話です。六十になると自らそこに

行くわけですが、毎日農作業の手伝いに里に下りてくる。「檀山節者」は行つたきりなんです。こちらには里に下りてきてこの生きたり死んだりする感覚が私には新鮮だったの。人間の尊厳が損なわれずに姨捨が行われているというか。それが雪で閉ざされるよ



うになると下りて来られなくなつて、日々の糧を得られなくて死んでいくということなんです。自分が六十になつたときはこの小説が迫つてきて、ああ、もう死ぬんだなと。今年は死後2年目ということになります。

迎 この「藤野」は村田さんがお付けになつたんですね。
村田 ほんとはセンマイなの。あの綿毛が雪に埋もれているおじいさんおばあさんの白髪をイメージしている。でもセンマイ野ではおかしいので「藤野」に。

迎 方言も独特ですね。
村田 東北の話に限定したくなかつたので、東北弁を使わずに言葉を変ええました。古語を入れて語尾を変えて他にない言い回しにしたの。

以下略

◆朗読

NHKアナウンサーの皆さんが北九州



ゆかりの作家の作品を朗読しました。朗読が始まると会場は作品世界に一変。情景が目に浮かぶ力演に惜しみない拍手が送られました。

三上たつ次アナウンサー
・火野葦平「花と龍」

・劉寒吉「阿蘇外輪山」
迎康子アナウンサー

・村田喜代子「藤野行」

垂水千佳アナウンサー

・リリー・フランキー「東京タワー」

和田源二アナウンサー

・松本清張「左の腕」

▲五木寛之氏を招き

開館記念特別講演会

11月13日、作家の五木寛之氏を招き、北九州芸術劇場・大ホールで、「開館記念特別講演会」をひらきました。定員千二百人の会場が満員で、演題は「もう一つの明治」。もっとも集客力のある作家として知られる五木氏は、手荷物を下げて一人で訪れ、「小倉に誘われると断りきれなくてね」と、いつもの穏やかな笑顔です。

五木氏のお父さんは、小倉師範学校の出身で、「国漢」の教師になり、植民地時代の朝鮮に赴任しています。講演でお父さんのことも話題にし、明治と昭和の時代を比べながら、「日本人論」になりました。重厚なテーマをユーモアをまじえての展開で、一時間半の予定が十五分延長しても、だれも席を立たない魅力ある内容でした。